

## 解説



# 経営委員会第4回座談会

## 日本の閉塞感を打破するための品質工学の活用を探る

*Exploring the use of Quality Engineering to break down the sense of stagnation of Japan*

伊藤 源嗣\*<sup>1</sup>  
Mototsugu Ito

谷本 勲\*<sup>2</sup>  
Isao Tanimoto

近岡 淳\*<sup>3</sup>  
Jun Chikaoka

中井 功\*<sup>4</sup>  
Isao Nakai

中島 建夫\*<sup>5</sup>  
Takeo Nakajima

矢野 宏\*<sup>6</sup>  
Hirosbi Yano

(司会) 齊藤 潔\*<sup>7</sup>  
Kiyoshi Saito

### 1. はじめに

齊藤 品質工学会経営委員会の第4回座談会を始める。2013年2月に開催した企業交流会でも取り上げた「日本産業界の閉塞感を打破するために品質工学は、どのような貢献が出来るのか？」に関して、もっと深掘りをしていこうというのが本日の趣旨である。はじめに、企業交流会当日発表した谷本氏から、確認のための要旨説明をお願いする。

### 2. 失われた20年の振り返りからの課題認識

谷本 この「失われた20年」と言われる中で一番大きくつまづいたのは電子・電機業界である。その原因を捉え、これからどう対応すべきかを考えることは非常に大切だと思う。

変動の起点は、プラザ合意からの円高にある。そしてわれわれが円高にシャカリキに対応している陰で世界的な構造変動が起こっていた。東西冷戦の終

結である。東西冷戦の終結は二つの大きな変化を引き起こした。デジタル化とグローバル化である。

デジタル化は冷戦終結の結果米国の軍事技術であるパケット通信技術が民間に放出されたものである。今のネット社会を構成しているベースである。デジタル化はデジタル商品が増えて、一時的には日本の産業界、特に電子業界を潤した。その中で、米国家業界は極めて戦略的に動いた。その戦略を支えたのがスピードと標準化である。携帯電話にせよ、スマホにせよこの会社もみんな同じ格好で、機能もほぼ同じ。そこにどれだけのソフトを盛り込んだかだけの世界である。この中で日本が従来得意としていたすり合わせ技術が影を薄め、半導体技術とソフト技術のこの二つだけに特化するようになってしまった。日本の競争優位性が失われたのである。これが、いわゆるデジタル化社会の正体であり実態である。

もう一つ大きな変化はグローバル化である。このグローバル化への変化を作ったのも東西冷戦の終結である。日本にとってみればある日突然、直ぐ隣に10億の労働市場が出現したということになる。更にデジタル化による技術の単純化がこれに拍車をかけ、この二つの変化が、電子・電機業界を大きく変質させていった。その中で、われわれがそのことに気がつかなかったこと、気が付いていたとしても本質的な手が打てなかったことが非常に大きな問題である。

\*<sup>1</sup> (株)IHI

\*<sup>2</sup> アルプス電気(株)

\*<sup>3</sup> (有)近岡技術経営研究所

\*<sup>4</sup> (株)アサヒ技研

\*<sup>5</sup> 東京電機大学

\*<sup>6</sup> 応用計測研究所(株)

\*<sup>7</sup> 富士ゼロックス(株)